地区同好会員の年齢分布とその特徴

記念誌編集委員会

歴代の八碁連同好会長がこぞって就任挨拶で、会員の平均年齢が確実に上昇しており、近い将来、会の運営に支障が生じる心配があると指摘しています。各同好会が協力して小中学校生の育成計画などを含め、新会員の勧誘や若返りを考え、会の活性化を進めなければならないとも訴えています。入門コース、初心者教室、級位者認定大会なとの努力が徐々には実を結びつつありますが、新会員の獲得は依然として課題となっています。

そこで、会員年齢の上昇という特徴はどのような課題を提起しているかを会員数が多い浅川、恩方、大和田、長房、そして南大沢囲碁同好会の実態から調べることにします。この 5 つの同好会の会員合計は 220 名で、11 同好会全体の 64%を占めています。従って、これらの同好会の会員年齢の推移を調べることによって八碁連全体の会員の年齢動向を予想することが出来そうです。

五十音順に５つの同好会の年齢を単純集計すると次のようになります。

同好会	会員数	平均年齢	標準偏差	68%の会員年齢	95%の会員年齢
浅川	40	77.15	9.94	67.21～87.09	57,27～97.03
恩方	45	78.34	4.87	73.47～83.21	68.29～88.28
大和田	34	75.25	6.97	68.29～82.23	61.32～89.2
長房	61	76.75	6.25	70.5～82.7	64.55～88.65
南大沢	40	77.63	7.08	70.55～84.71	63.47～92.79

表１　５つの同好会の年齢分布

解 説

表１の読み方と用語から説明します。「標準偏差」とは、あるデータが持っている「ばらつき」(散布度)の指標といわれます。同好会の会員データでいいますと、ばらついているという状態は、ざっくりいいますと低年齢者から高年齢者にまたがっているということです。会員一人ひとりの年齢から、会員年齢の平均を引いたものを偏差といいます。偏差は，平均からの距離ともいえます。ばらつきとは，偏差が大きいか小さいかということなのです。仮の話ですが、もし会員全員が 78 歳としますと、当然平均値は 78 歳、ばらつきは０となります。

データというのは、会員数が多いと年齢は「正規分布」するという性質があります。正規分布では、平均(真ん中)に近い会員が多く，平均から遠い会員は少なくなります。言い換えますと、平均年齢から１標準偏差のまわりに 68%くらいの会員が分布し、２標準偏差の間にはだいたい 95%の会員が入るのです。

各同好会の年齢分布をながめてみます。恩方の会員年齢分布では。平均年齢が 78.34 歳でばらつきである標準偏差が 4.87 というように、平均値の周りに分布しています。正規分布図では、78.34 歳を中心として先が尖った釣り鐘上の形となります。分布の裾野が狭いことを示します。浅川、大和田、南大沢は、まだ年齢が若干ばらついているのが標準偏差でわかります。それでも、浅川は年齢分布の裾野が広く 95%の会員は 57.27 歳から 97.03 歳まで、大和田の 95%の会員は 61.32 歳から 89.2 歳まで、南大沢の 95%の会員は 63.47 歳から 92.79 歳までとなっています。浅川の場合、昭和 60 年生まれの会員が平均を下げ、標準偏差を広げています。

このような同好会員の特徴とは、平均年齢が高く、ばらつきが小さいということです。この状態が懸念される理由は、高齢の会員が短期間に脱会する現象が起こると、がくんと会員が減るのです。高齢化の懸念とは、平均年齢が高いということよりも、年齢のばらつきが小さいことなのです。つまり後継者の予備軍が少ないということです。浅川と大和田同好会を除く同好会の会員は 68%以上が 70 歳以上となっています。特に恩方同好会の高齢化は著しいといえます。

平成 22 年から平成 30 年まで、会員の減少傾向が見られます。特に最近５か年を調べてみますと、11 の同好会会員の平均年齢は平成 26 年度で 75.3 歳、そ

れ以降 75.1 歳、76.2 歳、76.4 歳、76.9 歳と少しずつ上昇しています。5 年間で 1.5 歳上昇しています。このままでいきますと、5 年後の 2023 年には恐らく 77.5 歳に、さらに 2028 年には、79.1 歳、2032 年には 80.7 歳になると予想されます。高齢化が平均を引き上げ、年齢のばらつきも同じように小さいという特徴を示すことが予想されます。

八碁連の囲碁人口の裾野を広げること、普及と啓発を進めるという目標がどこまで浸透するかによりますが、年齢のばらつきが広がり、平均年齢が下がるという見通しは、ひとえに各同好会が 40 代、50 代、60 代の初心者育成や新規会員の獲得という努力にかかっているといえます。とはいっても会員の漸増が続くのが 5 つの同好会です。この現象は、会員増強や獲得の努力が続いていることを示します。初心者とか初級者の養成に力を入れています。新会員の方々の多くの年齢は 70 代でしょうが、今後 60 代の人が入ってくると平均年齢は下がり、ばらつきは大きくなります。

会員の平均年齢を大幅に下げようとするならば、将来小学生や中学生、高校生や大学生の入会を認めるといった発想も考えられます。それには会則の改正が待ってはいますが、伝統文化の囲碁の普及と発展を目指している八碁連は、今や若い人々の募集や育成にもっと傾注すべきときだと考えます。5 年後、10 年後の目標もさることながら、今日、明日の目標はなにかを考える時期なのです。終わりに、会員数が最も多い長房同好会の年齢分布図を示しておきます。

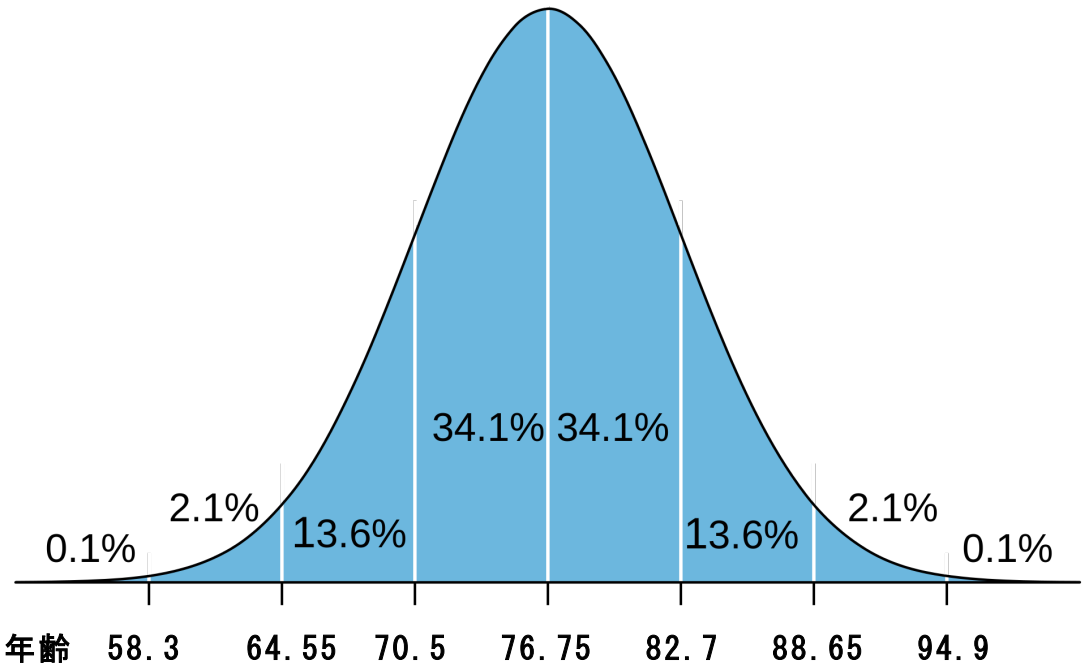

図 1　長房囲碁同好会会員の年齢分布

追　記

参考ながら、正規分布の例から学校における生徒の成績で標準偏差を考えてみます。生徒の成績について出来不出来の差が大きいときは、ばらつきの標準偏差が大きく、出来不出来の差が小さいとき標準偏差は小さくなるのです。指導法が良いと成績の平均値が上がるだけでなく、成績のばらつきが小さくなるのです。このように標準偏差は教育評価の指標ともなります。学校では偏差値という指標をしばしば使います。偏差値が 70 以上の学校というのは、全体の上位 2.2%に入っている成績の生徒が学ぶ学校ということです。ちなみに偏差値が 80 以上は上位 0.1%の生徒のことです。10 万人の生徒の中の上位 100 人が入る学校は、超難関校といえるでしょう。